

女性語のゆくえ : 絆として鎧としての女性語の可能性

因, 京子
九州大学留学生センター

<https://doi.org/10.15017/1654552>

出版情報 : 言語文化叢書. 15, pp.30-45, 2005-03-18. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :

女性語のゆくえ：絆として鑑としての女性語の可能性

因 京子（九州大学留学生センター）

0. はじめに

本稿は、近年発表された小説、マンガ、エッセイなどに見られる性差を表示する表現、特に、女性が使うとされる表現形式（女性語）の観察を通して、その使用の広がりや表現手段としての可能性を提示することを目的とする。

言語の使い方に性差があることは、日本語に特有の現象ではない。よく知られている Robin Lakoff の *Language and Women's Place* (1975) は、英語における女性的特徴として、*lovely, divine* などの語彙の多用、付加疑問文の多用、強い断定の回避、上昇イントネーションの多用などをあげた。しかしながら、英語のこれらの特徴は男性の言語に現れないわけではなく、あくまでも「多用」されることによって女性的な特徴となるのであって、単一の使用では性差は明示されない。これに対して日本語の女性のことばは、間接性の高い形式の多用というような英語と共通する特徴もあるが、終助詞の「わ」、疑問表現「かしら」「名詞+ね(↑)」、間投詞「あら」「まあ！」など、専ら女性によって用いられる言語形式（女性語）があり、それらは一度使用しただけでも話者の性別が示される。また、男性によってのみ使用され女性が使用すると強い違和感が生ずる形式も存在する。日本語の普通体会話の文末においては、男性的、女性的、中立的な表現のどれを用いるか、表示自体を回避するか、ジェンダー表示について何らかの選択をせざるを得ない。

女性的なことば使いはフェミニズム的な視点から女性が社会的に低い地位にあることの表れであると否定的な評価を受け、日本語についての先駆的研究も、女性を女性らしさの枠の中にはめ込むものとして女性的なことば使いに対する否定的な見方を提示した（寿岳 1979）。これに対し井出他（1985）は、女性は固定的な言語の使用を強制されているわけではなく、様々な丁寧度の日本語を主体的に使い分けていることを示し、女性的と見なされる丁寧度の高い言語の使用は女性自らの品位の表示と見ることもできると述べた（井出 1997）。松村（2001）も女性の言語の自発的な多様性に言及している。

今日の日本では、言語が男女共に中性化し、女性専用形式は現実の生活の中で使われることが少なくなってきたと指摘されている（尾崎 1997、中島 1997）。しかし、性差に結びつく表現が井出や松村が観察したように多様な態度を表明する上で見逃すことのできない役割を果たしていることも事実である。因（2003、2004）では、性別を示す表現の標準的使用が話者の自己表現として、また、逸脱的使用が会話ストラテジーとして、効果的に機能することを報告した。更に、男女共に表現が中性化し性別を表示する表現の使用が減少した今日、話し手のジェンダーと一致した性別語を使用することも場合によっては有標の選択となり、その使用が単に話者のジェンダーを表示するという以上の印象を与え得る可能性が出てきている。また、話し手のジェンダーと一致しない性別語の使用、殊に、

以前はかなり抵抗のあった男性による女性語使用ですら、必ずしも「他人格モード」(一時的に別人であるかのように振舞うストラテジー)としてだけでなく、通常の言語使用の延長上に行われる場合も出てきたようである。本稿は、このような女性語使用の新たな傾向を観察しその表現手段としての可能性を提示することを目的とする。

まず、第1節では、女性語と呼ばれてきた表現特徴について再検討し、本稿で扱う女性語の範囲を明らかにする。第2節では男性による発話に見られるようになった女性的表現使用の例とその効果を観察する。続いて第3節では女性による攻撃的発話の中に見られる女性的表現使用の例、第4節ではエッセイにおける同様の例を提示し、女性の攻撃的発話における女性語使用の機能について考察する。第5節では本稿の観察をまとめる。

1. 男性語・女性語とは

日本語において性差を示唆する表現特徴は、少なくとも3つのレベルにおいて見出すことができる。まず、日本語学習者向けの教科書や参考書にも提示されているような代表的表現として、終助詞を含む文末形式(「いいわ」「いくぜ」「くるかしら」「そうかい?」等)、人称(「あたし」「ぼく」「おれ」等)、音声の崩れ(「すげえ」「きたねえ」等)など、語彙・文節レベルに見出される違いがある。次に、断定を回避するか多用するか、間接性の高い表現や上昇イントネーションを多用するかどうかなど、談話レベルでの表現選択の傾向にも違いが見出せる。また、話題提供を積極的に行うかどうか、沈黙修復を頻繁に行うかどうかなど、言語行動の選択傾向についても性差が表われる(内田 1997)。このうち、談話レベルや言語行動の特徴は他の言語とも共通する点がある。それらは傾向として見出されるものであり、独立した使用によってジェンダーが明示されるわけではない。

独立した使用でも性差が表われる表現や、文末など性差表示についての選択が義務化される構造が存在するのは日本語の大きな特徴であるが、性の区別は二項対立的なものではなく、異性による使用が違和感を与えるもの、異性によっても使用可能なもの、中立的なもの、いくつかの段階があることが指摘されている(高崎 1996、中島 1997、因 2003)。ある表現に対してどのような印象を持つかは、時代や地方によっても、厳密に言えば個人によっても異なるが、大まかな基準としては上のような区分けが考えられるであろう。

ここで所謂「女ことば」について一つの事実を指摘しておきたい。それは、「行くぜ」「行くぞ」「めんどくせえ」などの「男ことば」と言われる形式がかなり広く男性一般に使用されるのに対し、標準語の発話において「女ことば」の代表選手のように目されている「行くわ」「返さなくてよ」などの表現は、多くの女性の話し手にとって身近なものではなく、使用に少なからず抵抗を覚えるものであり、もし使用するとすれば明確な自己演出意識に基づくであろうということである。というのも、性差の特徴がよく表われる普通体基調の会話は典型的には気の張らない人間関係の中でなされるが、そのような会話には同時に方言の特徴が表われるのが普通である。ところが、方言によっては、女性専用の形式が存在

せず男性専用の形式と中立的形式のみがあり、男性専用形式を含むのが「男ことば」、中立的形式のみによってなされるのが「女ことば」と見なされるという事情があるのである。例えば、筆者の居住する福岡地域の方言では、

(1) a. 「すんだ(ね)？」「何しよう？」「いくよ。」(女性も男性も使用)

b. 「すんだや？」「何しようや？」「いくぜ。」(男性のみ使用)

と、bのような男性専用形式とaのような中立的形式の対立はあるが、女性専用の形式はない。aのような表現の使用は女性にとっては無標であり、男性によるaの使用は確かに丁寧度の高まりを感じさせるが、決して女のようにという印象を与えるものではない。同様の事情を、紀州新宮の言葉について中上健次は次のように述べている。

(2)紀州弁、いや、新宮弁には、敬語、丁寧語がない。「この小説を、あなたはいかが思われましたか？」そう合評会で、目上の人に訊くとする。それを紀州弁にすると、「この小説を、あんた、どう思たん？」となる。これは女言葉である。それを男のぼくが、使って、それで敬語、丁寧語の代用にする。男言葉では、「この小説を、あんた、どう思たん？」となる。

(中上健次「紀州弁」『鳥のように獣のように』)

筆者をはじめ、明確な女性専用形式が存在しない方言の環境に育った女性にとっては、「いい？」「行くよ」「言ったよ」というような標準語の中立的表現は、自分のもともとの言葉と多少の違いはあるもののそれほど隔たった感じはしないが、「いいかしら？」「行くわよ」「言ったわよ」のような標準語の女ことばによる発話を行うことにはかなり強い抵抗を覚える。典型的な「女ことば」による発話は、リラックスした気分のときに自然に現れるものでは決してなく、行なうとすればかなり明確な自己演出の意識を伴うものだと言える。現実の生活でのやり取りの中で女性専用形式の使用が少ないという現象の裏には、「減少した」というよりも、もともと身近な言葉と感じていなかった話し手の存在を考えるべきかもしれない。

本稿では、標準語で書かれた小説、エッセイ、マンガの中に使用された独立した形式として性差を示すことのできる表現を対象とし、因(2002, 2003)で用いた下のような基準に基づいて分析を進める。F・Mをまとめて「性別語」、FN・N・MNをまとめて「中立語」、女性の男性語使用、男性の女性語使用を「異性語使用」と呼ぶことがある。

(3)

	種類	対象	例
F	女性語	男性が用いると強い違和感があるもの	「行くわ」「なさる？」
FN	女性的中立語	女性的だが男性も普通に使えるもの	「どうしたの？」
N	中立語	性別的でないもの、回避的表現	「行った？」「遅いから」
MN	男性的中立語	男性的だが女性も普通に使えるもの	「そうだね」
M	男性語	女性が使うと強い違和感があるもの	「行くぜ」「きたねえよ」

2. 男性の発話にみるジェンダー表示

本節では、男性の発話に用いられるジェンダー表示を観察する。まず、男性による典型的な標準語の発話というものはどのようなものであるかを見てみよう。外国の町を舞台として描かれたマンガ作品には、その虚構性ゆえに、「典型」という往々にして虚構的でない産物が純粋な形で出現する。(4)と(5)は、イギリスのロンドンに滞在する外国人が話しているという設定であるが、ステロタイプの男性語が観察できる。(以下、例文中、男性の発話のなかで性差の特徴が表われている、または、性差の特徴の選択が必須である成分には下線を施し、(3)で規定したどの種類に属すかを記号で示した。)

(4) 森薫『エマ』4

ウィルヘルム：そろそろうんざりしてきた頃だろう (M)。ハロッズカリバティーか? (M)

ドロテア：あら、いいわね。

ウィルヘルム：欲しかったのは、冬用の帽子だったか? (M)

ドロテア：コートもよ。イギリスは寒いわ。

ウィルヘルム：そうか。(M) イルゼへの土産もな。(M)

(5) 森薫、前掲書

ヤン：トマスんとこもか (M) ?

トマス：弟がな (M)、ベルリンで社会黨員になるとかなんとか言ってよ (M)、当分会ってねえけど (M)、そのくせ自分はロンドン帰りとか言うんだぜ (M)。

ヤン：姉貴の自慢は聞き飽きたね (MN)。・・・ところで、このまねメイドで入った、あれなんて言ったっけ? (N)

トマス：エマ? (N)

ヤン：いいよな (M)、あの子。

トマス：そうか? (M) 俺 (M) はだめだな (MN)、ああいう暗いのは。何考えてるか わかんねえし (M)。

(4)と(5)に登場する男性たちは、親密な関係であれば相手が男性であっても女性であっても男性語の頻出する発話を行っている。2004年に出版されたこの作品でも、男性による典型的な発話はこのように男性語優位のものとして描かれている。

しかし、現実的な描写が行われていると思われる作品においては、男性の発話にも違うタイプのもので出現する。石田衣良の短編小説の一部である(6)(7)では、若い男性である「スギモト」は、女性の「花」と話すときと男性の「青治」と話すときでは明らかに言葉を変化させ、女性に対する時は男性語使用を抑制している。

(6)石田衣良「泣かない」『スローグッドバイ』から

スギモト：もしもし (N)

花：ごめん、おこしちゃった?

スギモト：いや (MN)、起きてたよ。(MN)。で、どうしたの? (FN) また、青治とけ

んかした? (N)

花：今度は、ほんとにダメみたい。

スギモト：そう。 (N)

花：まあ、そんなこと、スギモトに言ってもしょうがないよね。

スギモト：そうだけど (N)、そっちは大丈夫なの? (FN)

花：まあね、いつかはこんな日が来ると覚悟してたし。誰かに話せば気が済むかなと思って。

スギモト：ふーん、なかないんだ (MN)。

(7)石田衣良、前掲書

青治：はあい、誰だよ、こんな時間に。

スギモト：よう (M)、起きてた? (N)

青治：なんだよ、スギモトかよ。明日じゃダメなのか。

スギモト：こっちも電話で起こされたんだ (MN)。わかるだろう? (M)

青治：花か。

スギモト：そう (N)。今度こそ、別れたって言ってたけど、本当なのか (M)。

青治：ああ、どうせまた、俺の悪口言ってたんだろ。

スギモト：それもある (MN)。今度はモデルの子と付き合うんだろ (M)。いつもなら浮気で済ませるのに、別れるなんて、本気なのか (M)。

花に話すときのスギモトの発話には中立語のみが使われ純粋な男性語は出現しない。その結果、現代の若い女性らしく中性語を主に用いる花の言葉とスギモトの言葉は非常に似通ったものになっている。スギモトは、相手の言葉への同調によって相手に寄り添う態度を示しているのであるが、女性専用形式は使っていない。現代の若い男性の言葉づかいとして、スギモトのそれは決して特殊なものではないが、女性に対して「同調」を行わず男同士の場合と同じように話す男性も多いだろう。例えば、(7)でスギモトと対話している「青治」は、恐らく花に対しても男性語を用いるのではないかと想像される。上の作品には青治が女性と話す場面が描かれていないので断定はできないが、利己的だが女性に好かれ、自信たっぷりという彼の人物から想像するに、きっと女性に対しても自分の素の話し方を調整したりはしないのではないかとと思われるのである。

男女の言葉の区別がだんだん曖昧になってきているといっても、(3)であげた F または M レベルの異性語は普通には使用されない。だからこそ、何かの点で差し障りがあるかもしれないことを述べたい場合に、コミットメントを留保し「冗談」の衣を纏わせて通用させるというストラテジー（「他人格モード」）として異性語が意図的に利用されることを因(2003、2004)で報告した。「他人格モード」は、一言で言えば「文体による冗談」と言うべきものである。ここで説明しておく。

(8)「他人格モード」では、話し手の立場や特性から通常期待される文体の範囲

からの明白な逸脱が認識されることによって額面通りではない解釈が産み出される。しかし「他人格モード」の発話の内容は、大真面目の本音そのものであり得る。いわゆる「冗談」も、話し手が発話に対するコミットメントを留保することによって緩衝作用を生じさせる点では同じであるが、「冗談」における留保は基本的には発話の内容が額面どおりには受け取りがたい逸脱を含んでいることから理解される。文体の意識的逸脱による「他人格モード」は翻訳が難しく、日本語学習者にとって理解が非常に困難なものの一つである。(中略) 他人格モードはレジスターの大幅な移行や方言の使用などによっても実現される。(因 2003: 783-4)

次の(9)は、自己防衛のために「他人格モード」によって滑稽さを出そうとしている例である。「晶彦」は、文末表現などには男性語を用いず中立語を主に用いて女性である実果に寄り添う態度を見せつつも、自称には男性専用形式「俺」を用いていたのだが、自分に対する実果の評価を尋ねる際には女性の自称「ワタシ」を用いている。意図的に異性語を使用し他人格のように装うことによって、自己を相対化し、相手に普段見せていない姿を見られてしまった当惑を隠そうとしているのである。

(9)池谷理香子『さよならスモーキーブルー』

実果：生霊とかね。

晶彦：やめてよ (FN)、俺(M)、そういうの、本当こわい (N)。実果ちゃん、クラブとか嫌いって言ってたじゃん (N)。

実果：うん。

晶彦：なんで一人で来るの (FN)。俺 (M) と来ればいいじゃない (N)。

実果：だってあたしとこない時の晶彦が見たかったんだもん。

晶彦：うはは、へんなのー (N)、で、どうだった (N)？ワタシ (F)。

実果：モテてた。



ここまでの観察をまとめると、男性は親密な男性同士で話す際には男性語の頻出する発

話を行うが、親密な女性と話す際には、「同調」のストラテジーによって女性に寄り添う態度を示す場合がある。同調のためには「中立語」が多用され、女性語は「他人格モード」という、自己防衛のための冗談など更に特別の動機を持つストラテジーとして用いられている。

次の(10)における「タロちゃん」は、かなり女性専用に近い形式を「他人格モード」としてではなく自己のアイデンティティを保ったまま用いている点で注目される。「タロちゃん」は、親しい関係ではあるが自分よりかなり年上の女性である「明子さん」に対して女性語を頻繁に使っている。一方、明子の娘の「郷子ちゃん」に対して話している(11)では男性語の多い発話をしている。また、「タロちゃん」は、図2の絵からもわかるように、決して女性的な男性ではない。これらのことから判断すると、彼の女性語使用は決して彼の「地」なのではなく、明子に対して「同調」というストラテジーを用いているのだと考えられる。

(10) 池谷理香子『ママ』

タロ：どんくせいな (M)、明子さん。

明子：ったく、やんなっちゃうよ。

タロ：どーすんの (FN)、店。それじゃ休むしかないか (MN)。

明子：冗談でしょ。治るのに一ヶ月はかかるのに、そんな長く店閉めたら、大変よお。

タロ：んじゃ、雇われママでも探すの? (FN)

・・・・中略

明子：あのコの性格、問題アリだと思わない?

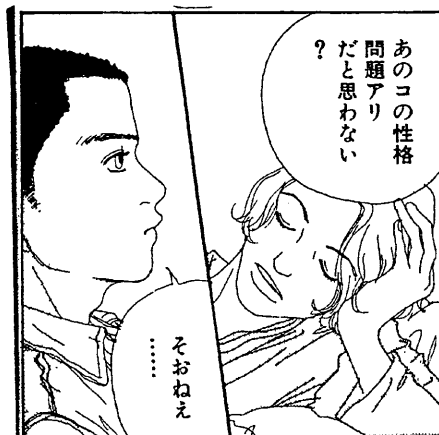
タロ：そおねえ。(FN)

明子：すっごく外面いいし、人目を気にしすぎるし、ヘンにプライド高くてすましてるし。

大体さー、あたしのお金で育ったくせに、どっか見下した態度なのよね。大学は入ってから特に。むかつくわー。少しはあたしの苦勞、思い知れっていうの。

タロ：結局、そこなのね (F)。

図2 ママ タロちゃんと明子さん



(11) 池谷理香子、前掲書

タロ：ま、まだ手際が悪いから大変だろうけど、明子さんなんか一人でやってんだぜ。(M)

郷子：妖怪だわ。

タロ：でも、みんな悪い人じゃねえだろ? (M) モタモタしてても笑ってくれたしサ。(MN)

郷子：まあね。

タロ：ところで、郷子ちゃん、どうやって帰んの? (FN) 原チャリ? (N)

郷子：全然考えてなかった・・・

タロ：えっ、もう二時だぞ。(M) しょーがねえなあ。(M) 俺 (M) の家泊まる? (N)

(10)でタロは、自分の住んでいる部屋のある建物の一階でスナックを経営しており、その部屋の貸主でもある明子に対して、タロは「そおねえ」「そこなのね」など、女性的な感じを強く示す表現を用いる一方、自分の素顔を示す男性専用表現の使用も抑制していない。明子に対して寄り添う態度と自分らしく寛いだ態度とを両立させ、敬意に欠けることなく明子との親密さを強化する高等技術を発揮している。

一方(11)で、タロよりも4、5歳年下で、母の代わりに初めて接客業の仕事をして悪戦苦闘の郷子に対して、タロは、男性語の多い発話を行なって自分の素顔を遠慮せずに出している。ここでタロと郷子の力関係を考えると、タロの方が年長であるだけでなく、スナックの常連客と顔馴染みであるなど仕事についての知識や経験も勝っており、二人の関係の構築において初めの一步を踏み出す権限と責任はタロの側にあると言える。男性専語が頻用される地をさらけ出したタロの発話は、「お互いに防衛したり飾ったりせずにざっくばらんに付き合おうよ」というタロの側からの接近の誘いかけを表明するものと解釈できる。

以上、男性の発話も、男性語を専ら用いるステロタイプのものばかりでなく、女性語を用いた「他人格モード」のストラテジーや女性への同調が見られるものが出現し、多様になってきていることが観察された。同調の方法にも、男性語の使用を抑制し中立語を用いるやり方と、男性的な感じの強い表現と女性的な感じの強い表現とを混在させるやり方の二つが見られる。特に後者は、上位者に対して自分の立場を弁えつつも同時に寛いでもいる心情を表現することを可能にし、上位者に対して高度なポライトネスを実現する手段として注目される。

3. 女性の発話にみるジェンダー表示

本節では、女性専用表現ないし専用とは言えないまでも女性的な感じを強く与える表現が女性の攻撃的発話に使用される例を観察する。既に述べたように、「そうだわ」「そうかしら」などの文末表現に代表される「女ことば」は現代の女性の発話の中ではそれほど多く使われていないと指摘されており、作品に見られる会話でも、例えば(6)の花や(9)の実果などは自称を除けば中立語を使っている。現代女性の発話に女性的な表現が全く使われ

ないのではなく、(10)の明子ように女性語をかなり用いる話し方も非現実的な印象を与えはしないが、女性語の中でも「手加減しなくてよ」のような「て形+よ」(「女学生言葉」、或いは「いらっしゃる?」「あちらでお待ちになれば」のような同等または目下の相手に用いる「普通体の尊敬形動詞(同等者待遇の表現と上位者待遇の表現とを混在させた表現)など、過激に女性的印象を与える形式を日常的に使うことは少なくなっていると言ってよいだろう。

ところが、最近の作品の中には、本気の強い攻撃的意図が存在する場合に非常に女性的な、むしろ、過度に女性的とも言えるような表現が使用される例がしばしば見られる。下にあげたのは、逢坂みえこ『9時から5時半まで』に収録された「うるわしのお局」の中で、ベテラン女性社員レイ子が、ミスばかりする部下への募る苛立ちをトイレで独りで吐き出している発話(12a)と、部下をいよいよ利用するだけして失敗の責任は取ろうとしない利己的な男性社員を非難している発話(12b)である。

(12) 逢坂みえこ『9時から5時半まで』

a.レイ子:(トイレで、一人きりで)

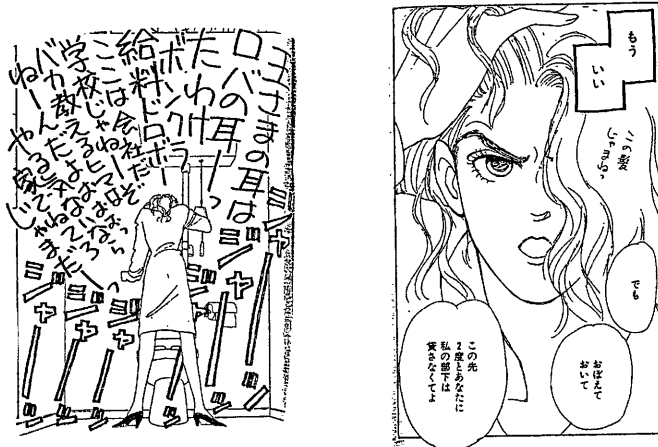
大様の耳はロバの耳一っ!たわけ、ぼんくら、給料ドロボー!ここは会社だ、学校じゃねーぞ、バカ教えるヒマはねーんだよ!やる気ないなら家でねてろ一、じゃまだ一!

b.レイ子:おだまり!「触るな、僕の原稿だ」?で、ミスすりゃ「お前の責任だ」?まあ、まあ、御都合いいじゃないのオ。成功すりゃおのれの手柄で失敗すりゃ部下のせいってわけ。これまでさんご責任者ぶって部下を道具扱いしてきたんでしょ。だったら最後まで責任とりなさいよ。ただの道具に非はないわ。確認怠ったあなたのミスよ。

丸ノ内:道具とはイヤミな言い方ですね。僕はただ効率よくいい仕事をしたいただけです。

レイ子:ええ、そうね。合理的で仕事熱心、一匹狼のコンサルタントだと思うわよ。でも覚えておいて。この先二度とあなたにワタシの部下は貸さなくてよ。

図3 うるわしのお局



ベテラン女性社員「レイ子」は、ミスをした部下を叱り付けるときも心の中で悪態をつくときも女性語を一貫して使っており、ステロタイプ的な話し方をする人物として描かれているのであるが、(12a)に見られるように独言としては非常に乱暴な男性語で悪態をついており、男性語を全く使わないわけではない。しかし、ミスばかりする部下に対する怒りとは比べ物にならないくらい激しい怒りを卑劣な行動を取った相手にぶつけ容赦なく攻撃する場面では、乱暴な表現で威嚇するという方法を取らず、「おだまり!」「取りなさいよ」「貸さなくてよ」など、抜きん出て女性的な形式を含む表現を選択している。

次の例も、非常に女性的な表現が攻撃性を示すことになっている。(13)は、消防学校訓練生の「こづえ」が気の合わない同級生「夏子」に対して行なった発話である。

(13) 逢坂みえこ「纏一」『火消し屋小町』①

夏子：あー、電話？だったら、これ（＝携帯電話）使って。

こづえ：（電話を取り上げて）こーゆーものは、持ち込み禁止のハズよね。教官室に届けさせていただくわ。

・・・（中略）・・・

夏子：お願い、見逃して・・・

こづえ：だめ。

夏子：教官室にだけは・・・

こづえ：持ってくわ。規律を守るのは消防吏員として最大の義務。それがイヤなら、お辞めになれば？一生懸命やってるこっちとしては、あんなみたいな人がいると、ムカつくのよね。

図4 火消し屋小町 夏子とこづえ



こづえはもともと女性語をかなり用いる話し手であるが、仕事を辞めるよう迫る極めて攻撃的な発話では、年齢もほぼ同じであらゆる意味で同等の同級生夏子に対し、尊敬形の述語という過剰に丁寧な、ジェンダーという観点から見れば非常に女性的な形式を採用している。

次の(14)は、メイナード(2001)に引用されているテレビドラマ「ロングバケーション」の一場面である。ここでは *flirtation* としての攻撃が行われているが、女性語は用い

られず普通体から丁寧体への移行が起こっている。

(14) 北川悦吏子「ロングバケーション」(1996)

南：何言ってるの？(＃)何言ってるの、今さら。ひとのこと、お姉さんとか、親戚のおばちゃんとかむちゃくちゃ言ってたじゃない。ワタシといると男と話してるみたいだって。

瀬名：そんなこと言ってないよ。

南：言いましたね。(メイナード 2001 p.91)

この例についてメイナードは、「ここで南が『言いましたね』と<です・ます>調になるのは興味深い。これには、次第に女性らしさを意識する南の心の変化が秘められている。はじめは女性であることを瀬名の前では否定して、あくまで<だ>で通していたのに、次第に女性らしく、<です・ます>を混合するようになるのである」(pp.91-92)と述べているが、この「言いましたね」を丁寧さや女性らしさの直截的表示と解釈するのは的外れであろう。これは、子どものときに誰でも一度は経験した「言った」「言っていない」「いや、言った」「言っていないってば」「言いましたっ」「じゃあ、いつ？何年何月何日何時何分何秒?!」というような口喧嘩の場合と同様、丁寧体によって突き放しているのである。もちろんこの突き放しは南の照れ隠し、ないし、「見せ掛けの喧嘩」という **flirtation** であり、メイナードも言うように恋心を意識しているのは確かである。**flirtation** としての攻撃にはジェンダー表示は利用されず、丁寧度の調整によるストラテジーが選択されていることが興味深い。

次の例(15)と(16)については、両者とも「店長」が「眉子」叱りつける発話ではあるが、受ける印象はかなり異なる。(15)には全て中立語と女性語が用いられ、最後の文には「てくれる」という待遇表現も用いられて見かけ上の丁寧度が引き上げられている。この発話からは冷静で深い怒りが感じられる。一方、関係が修復された後の発話である(16)は、男性語で行われ見かけ上は乱暴であるが、突き放した感じはない。この発話で表現されている相手への苛立ちは決して嘘ではなく本気なのであるが、同時に最終的に許しているという感じが伝わるのは、本音をそのまま表現しながらも「男性語による他人格モード」という表現調整を行っているからである。

(15) 鴨居まさね『雲の上のキスケさん』③

店長：石井さん、私今怒鳴る体力がもったいないから怒鳴らないけど、あなたを殴り倒したいくらい怒ってるのよ。最近特に気が散ってるみたいだし。ここに来て半年経ったけど、あなた一人のできるこことある？フェイシャルのマッサージ法ひとつにしたって順序すら覚えてないじゃない。

石井眉子：それは・・・

店長：仕事は集中して覚えなさい。私が3日間の講習で覚えてきたことを同じ3日でやれとは言わないから、せめて一ヶ月なら一ヶ月と決めて徹底してやりなさい。それができないなら、徹底して雑用の人になりなさい。そのかわり技術はもう

教えない。こっちはお金払って、その上、技術を教えてあげてるの。ヨソ見する人はヨソに行ってくれていいわ。(F)

(16) 鴨居まさね、同作品続き。(15)の場面の翌日

石井眉子：店長。雑用でもいいから使ってください。お客様の送迎も、今ペーパーだけど免許はあるんで、練習しときます。とにかくやれることからやっていきますから何でも、

店長：えらいっ！

石井眉子：へっ？

店長：そう言えるか言えないかが実は一番大きな差なのよ。じゃあ、さっそくこれの清書からお願いね。

石井眉子：あの・・・この字はなんて読むので・・・

店長：前後の文章から推察しなさい。私の字が汚いから清書してほしいってだけじゃなくて、一人一人のお客様のことを覚えさせるためでもあるのよ。手で書けば覚えるでしょ。

石井眉子：はい・・・終わりました。次は何を・・・

店長：じぶんで考えろっ！ (M)

図5 眉子と店長



以上見てきたように、女性の攻撃的な発話には女性語の意図的使用、特に、「わ」などの女性専用形式に「授受動詞による恩恵表示」や「尊敬動詞による上下関係表示」を組み合わせた高度に女性的な表現の使用が特徴的に観察される。

4. 女性語による攻撃の表現

ことさらに女性的な表現を攻撃的な発話に使用する現象は、マンガや小説に描かれた対話の中だけでなく、エッセイにも広がっている。斎藤美奈子『物は言いよう』(2004)は、

新聞、雑誌、書籍などに表われた女性差別的表現を取り上げ、それぞれの主題を 3000 字前後で論じたエッセイを集めたものである。「攻撃的で、軽薄なようで、嘲弄を多分に含み、しかし根においてフェミニズムの立場をとる『フリッパーンな』文体」（小谷野敦『すばらしき愚民社会』p.107）と評されるこの書き手の真骨頂が遺憾なく発揮された各エッセイは、基本的には「である」調であるが、男性語や俗語も縦横に駆使した「フリッパーン」な物言いが随所に顔を出して、筆者の肉声を直接響かせるような効果をあげている。最も多用されているのは、「じゃあいうな、という話である。」「そこまでにしておけ、ってことである」など、「引用」という枠の中に男性語や俗語など少々品位には欠けるがインパクトの強い表現を埋め込む手法で、その部分には直接のコミットメントが及ばない構造になっているため全体としては抑制の効いた冷静なトーンが保たれている。しかし、時として、特にエッセイの最後の部分で、基調である「である」調を捨て、違う文体が使われていることがある。例を見てみよう。

(17)男性語の使用されているもの：

a.露出過多の服装を「下着のようだ」「娼婦のようだ」と評するのは自由だが、昔の日本人は本物の下着姿（おばさんのシュミーズ、おっさんのステテコ）で外歩いていたんだぜ。（p.111）

b.だったら書くなっていうの。ここで逃げ腰になったばかりに、「予定調和」「お約束」「こずるい手合い」「敵を脅かさないくらいの批判的態度のオンナぶり」、すべて本人に跳ね返ることになった。批判するならきちんと固有名詞を出す。諸般の事情で出せないなら書かない。一般論としての批判がいちばん「差別的」なのだ。ふんどし、落ちかかっているぜ。

(18)丁寧体の使用されているもの

a.FC(=フェミコード)は芸術作品を鑑賞するときにも使用できる、という話である。大江さん、こういう文壇のありようは「芸者化」とは言わないんでしょうか。（p.218）

b.20年以上騒いだあげく、いざピルが解禁されたら利用者は少数で「性の乱れ」が進んだりしなかった（逆に言えばピルがなくても「性の乱れ」が進んだ）のと同じである。この先、結婚、離婚、再婚をくり返す人はどうせ増えるだろうから、そのたびに苗字が変わるほうが「社会の安定性」は失われるような気がしますけど。（p.263）

上にあげたような男性語や丁寧体を用いた例も相当に挑戦的であるが、女性語が用いられている場合の攻撃は、一段と激しいようである。

(19)女性語の用いられているもの

a.「男にはペニスってやつがあるからね。抑えが効かないんだよ」ってなこと
と
を言う男は少なくないが、聞いているほうは「抑えが効かないからどうなんだ」

ということまで必ず考える。「だから女を強姦してもいいんだ」といっているように、それは聞こえるのである。珍説を開陳するのもほどほどにね。(p140)

b.社説もこういう雰囲気¹に飲まれたのだと思うが、競技の成果には競技の話で応えるのが選手に対する礼儀。付け加えれば、あとこのズルさね。そんなに「お母さん作り」が好きなら、自分の言葉で言いなさいよ、自分の言葉で。あんたは社説なんだから、人の著作からの引用で責任回避を図るとは、ほんと、スポーツマン・シップにもとる「女の腐ったような」社説だわ。(p.70)

c.«オンナはずるい」「オンナは得だ」「オンナは楽だ」もの書きのみならず、男にまじって仕事をしていて、この手の言いがかりと一生無縁でいられる女性は少ないのではないか。こういう手合いを理論的に撃破するのは容易ではない。なぜってそれは理論的な攻撃というより、感情的な違和感の表明にすぎないからだ。私にいわせりゃ「ああら、それは嫉妬？」である。ごめんなさいね、得をさせていただいて。いっそ、あなたも女性名前の覆面でお仕事なさったらいかがかしら。

(pp.198-9)

このような攻撃に際して用いられる非現実的なくらいに典型的な女性語は、一種の防御策として機能していると見ることができよう。攻撃を行う場合、激しく乱暴であることによって相手を威嚇するという方法もあるが、強烈さを印象付けるよりも冷静な怒りを印象付ける方がしばしば有効であることは改めて言うまでもない。特に、女性に丁寧で奥ゆかしいことを求めてきた文化の中で、乱暴な印象を与える攻撃は、その原因となった怒りの正当性を吟味される前に「オンナらしくない」と拒絶され否定されてしまう恐れがある。こうした中で、「普通体」の「女性語」という選択は、「普通体」であるため相手に対するへりくだりを僅かにも示唆することなく、一方、「女性語」の使用によって規範を制御できる冷静さを失っているのではないこと、品位に欠けるわけでもないことを示すことができる。昂然と対峙する姿勢を維持しつつ、「育ちが悪い」だとか「オンナらしくない」だとかの伝統的女性像に感情的に訴える反撃を予め封じているのである。「弱さ・劣位」の象徴として否定的に見られることもあった女性語がいわば話し手の身を守る「鎧」の働きをしているのは興味深い。

女性の言語行動や取り上げるべき話題の範囲に男性にはない制約や枷がはめられていたことは確かである。荷宮和子(2003)は、石原慎太郎による「文明がもたらした最も有害なものはババア」という発言に対して「もしかして石原はインポではないか」と述べ、そのような露骨な発現をしたことについて、次のように述べる。

(20)今もなお、良識的な女性たちは、「はしたなさ」や「人間としての品格」といった制約の中で許されたボキャブラリーの範囲内で、戦うことを余儀なくされてしまっている。「ババア発言」について訴訟を起こした女性たちに対して、ほとんどの男たち、そして少なからぬ女性たちが、「冷笑」に近い反応を見せる理由とは、彼女たちが、「良識」というしぼりを受け入れていることの結果として、「フツー

の人たち」の共感を得られない文章しか書けない立場に追い込まれてしまっているからである。(二宮和子『若者はなぜ怒らなくなったのか』pp.197-8)

ある種の話題や語彙を用いることができないということだけに留まらず、既に述べたように、女性の言葉遣いのノルムが男性が使用すれば丁寧度の高まりを感じさせるバージョンであるという事情もあり、女性の言葉遣いと男性の言葉遣いの間には、単なる「言葉の種類の違い」ではなく、言語行動に対する「基準の違い」「許容度の違い」が存在することは否定できない。斎藤の前掲書には次のような指摘がある。

(21) 中年から青少年まで、私的な領域における男の言葉づかいはかなりひどい、という印象を私はもっている。「うるせえ」「だまれ」「バカ野郎」「この野郎」「てめー、ぶっ殺されたいのか」くらいは日常茶飯事。(中略) 女性の言葉づかいが厳しく叱責される一方で、男性の言葉づかいに言及されることが少ないのはなぜなのか。おそらくそれが乱暴とも不穏当とも特に認識されていないためと思われる。むしろ「親密さの証し」として歓迎されている節さえある。(p.105)

このような状況の中で、直截的な性的言及や攻撃や怒りの発露など、ストレートに行えば「冷笑」を招くだけに終わらねない内容を発信する方法として、反発や冷笑を覚悟の上で敢えてストレートにやっていく「目には目を」作戦も一つの選択肢であるが、戯画的なまでに典型的な女性的文体を完璧に用いてそれを行うという手もあるということに斎藤の女性語使用は気づかせてくれる。日常的な会話では使われることが少ないと言われる女性語であるが、こうした使い途もあるのである。

4. おわりに：絆として、鎧として

本稿では、新しい機能を帯びた女性語の使用が男性の発話にも女性の発話にも見られることを示した。男性の女性に対する発話の中に、女性的な感じの強い表現と男性的な表現とを混在させているものが見られ、女性に寄り添う態度の表れとして女性語が使用されていることが観察された。女性語が言わば「絆」として機能していると見ることができるだろう。一方女性の発話の中には、過剰なまでの女性語使用によって攻撃性を表したり、反発されたり無視されたりする恐れのある発話を行う場合の防御策として女性語が使用されていることが観察された。言わば攻撃の「鎧」としての機能であると言えよう。男女の言語に性差がなくなってきたのは事実であるが、女性語は、今後も表現において多様な機能を果たし得る使いでのある表現手段として存続していくのではないだろうか。

引用文献

- 井出祥子他(1985)『女性の敬語の言語形式と機能』文部省科学研究費研究成果報告書
井出祥子(1997)「女性語の世界—女性語研究の新展開を求めて」『女性語の世界』1-14,

明治書院

内田伸子 (1997) 「会話行動にみられる性差」前掲書、74-93

尾崎義光 (1997) 「女性専用の文末形式の今」『女性のことば・職場編』58-92、

ひつじ書房

小谷野敦 (2004) 『すばらしき愚民社会』新潮社

斎藤美奈子 (2004) 『物は言いよう』平凡社

寿岳章子 (1979) 『日本語と女』岩波書店

高崎みどり (1996) 「テレビと女性語」『日本語学』9月号、46-56

因京子 (2003) 「マンガに見るジェンダー表現の機能」『日本語とジェンダー』第3号、
17-36、日本語ジェンダー学会

—— (2004) 「ジェンダー表現の機能」『言葉のからくり—川上誓作教授退官記念論文集』
773-785、英宝社

—— (2005) 「日本語学習者の日本語会話解釈上の問題点—日本語学習者によるマンガ理解を通して」『比較社会文化』vol.11 掲載予定

中上健次 「紀州弁」『鳥のように獣のように』講談社

中島悦子 (1997) 「疑問表現の様相」『女性のことば・職場編』58-92、ひつじ書房

荷宮和子 (2003) 『若者はなぜ怒らなくなったのか』中公新書ラクレ

松村瑞子 (2001) 「日本語の女性語—女性=劣性の言語か—」『韓日言語文化研究』第2巻、
117-30

メイナード、泉子 K. (2001) 『恋するふたりの「感情ことば」ドラマ表現の分析と日本語論』くろしお出版

Lakoff, Robin(1975) Language and Women's Place. Language in Society 2, 45-80

例文の出典

石田衣良 (2002) 「泣かない」『スローグッドバイ』集英社

池谷理香子 (1998) 『ママ』ヤンユーコミックス 集英社

—— (1999) 『さよならスモーキーブルー』ヤングユーコミックス集英社

逢坂みえこ (1989) 「うるわしのお局」『9時から五時半まで』②集英社

—— (1999) 『火消し屋小町』①小学館

鴨居まさね (2000) 『雲の上のキスケさん』ヤングユーコミックス集英社

斎藤美奈子 (2004) 『物は言いよう』平凡社

森薫 (2004) 『エマ』④エンターブレイン